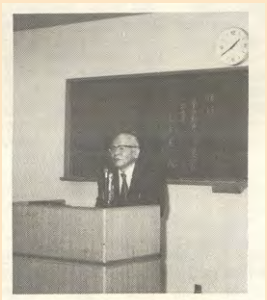
老人クラブ連合会 60年のあゆみとこれから

市内の老人クラブを取りまとめる「武蔵野市老人クラブ連合会」が令和6（2024）年で創立60周年を迎えました。昭和の高度経済成長期から平成、令和へ、高齢者の仲間づくり、生きがいづくり、健康づくりを支えてきた活動の歴史を振り返りながら、その役割や価値を改めて見つめてみましょう。

老人福祉法の施行が老人クラブの広がりを後押し

老人クラブは、市内在住でおおむね60歳以上の方が「健康・友愛・奉仕」をモットーに活動する自主的な組織です。旅行やカラオケ、コーラス、手芸、軽スポーツなど、活動内容はさまざま。現在、市内には22の老人クラブがあり、1419名の会員がいます。地域の老人クラブに入会した人は、「武蔵野市老人クラブ連合会（武老連）」に自動的に所属することになります。組織体制としては、武老連の上に東京都老人クラブ連合会（東老連）、その上に全国老人クラブ連合会があります。

武老連の会報誌『市老連だより（現・武老連だより）』の昭和56（1981）年3月発行号に掲載された東老連指導員・大本英一さんの講演録によれば、「日本の老人クラブの数はアメリカに次いで多い」とのこと。昭和28（1953）年、東京都の新宿生活館内に設立された「新宿生活館老人クラブ」が東京都初の老人クラブとされ、「当時のクラブの数も東京で百そこそこあった」といいます。その言葉通り、武蔵野市内で最初にできた老人クラブ「ムサシノ長生会」の設立は昭和32（1957）年。武老連『二十五年のあゆみ』によれば、「戦後初めて東京都新宿生活館内に都営で創設された老人クラブにヒントを得て、市内の篤志家が発案し有志一〇人が発起人となり、一二〇名の賛同者を得て」発会したと記されています。


講演中の大本氏＝2月28日市役所で

▲『市老連だより』昭和56年3月発行号より

大本さんは、老人クラブの良さとして、「仲間作りができること、物を作る喜び、知る喜び、健康管理の喜び」を挙げています。また、全国で老人クラブが盛んになったのは、昭和38（1963）年に「老人福祉法」が施行され、老人クラブの活動に助成金が支給されるようになったことがきっかけだったとも述べています。武老連が創立されたのも、まさに老人福祉法が施行された翌年の昭和39（1964）年のことでした。

当時、日本は戦後の復興を遂げ、高度経済成長の真っただ中。地方から都市部への人口流出が続き、核家族化が進む中、家庭内での高齢者介護が難しくなったことなどを背景に、高齢者問題を解決するための法律として老人福祉法は制定されたのです。この法律は、高齢者の生活の安定や健康維持を基本理念として、高齢になっても自分の生き方が選択でき、生きがいをもって自立した生活が送れることを目的としていました。武老連の理念も、基本的には当時の老人福祉法にのっとったものだったといえます。

当時の熱気をリアルに伝える『武老連だより』の誌面

武老連で今も名物イベントとなっている「シルバースポーツ大会」について、『市老連だより』の昭和55（1980）年11月発行号にこんな記事がありました。見出しは「シルバースポーツ大会　八百名の熱戦」。大野田小学校で行われた第5回シルバースポーツ大会は「これまでの最高の八百余名の仲間が参加し大盛況でした」と書かれ、掲載された写真からも熱気が十分に伝わってきます。

そしてもう一つ、武老連の活動の大きな目玉となっているのが、年一回開

取材・文／さくらい伸

催される「芸能文化祭」です。各老人クラブがカラオケやコーラス、踊り、フラダンスなどをホールの大舞台で華麗に披露するほか、手芸や書などの作品展示も併せて行われます。この芸能文化祭がいつから始まったのか、『武老連だより』をひもとくと、昭和61（1986）年3月発行号に「第一回芸能文化祭開く 2月21日（金）市民文化会館」という見出しを発見しました。記事には「余寒きびしいとはいえ、会場内は会員のたぎるばかりの熱気で、開会前からムンムン」と記され、「詩吟、民謡、日舞、コーラス等々二六クラブの競演がクッキリ描く照明とカラオケが見事な調和で披露され、終演まで息をもつかせぬ勢いで、場内は声援、拍手が鳴りやまず」と会場の熱気を伝えています。

作品展示についても「その内容と層の厚さに、『一日で終わるのは惜しい』の声や、〝チャリティーか、即売を〟の励ましの声も聞かれ」とあり、第1回から大盛況だったことが分かります。

▲シルバースポーツ大会の熱気を伝える『市老連だより』昭和55年11月発行号

▲第1回芸能文化祭の様子を伝える『武老連だより』昭和61年3月発行号

老人クラブは地域との関わりや支え合いを育む場

令和6年7月19日、武老連の創立60周年記念式典が市民文化会館で盛大に開催されました。武老連会長の木川憲子さんは記念誌のあいさつの中で、「設立当時、5クラブ、会員数1021人が平成6年には30クラブ、会員数3806人となりましたが、残念なことに現在22クラブ、1419人と減少してしまいました。コロナ禍で8クラブが解散という現実を踏まえ、会員の皆さまと共に魅力ある組織に成るべく活動をし、会員増強や後継者の育成などを推進してまいります」と述べています。老人クラブ数と武老連の会員数は、平成6（1994）年ごろをピークに減少していることは確かですが、木川さんに後日お話を聞くと、次のように語ってくださいました。

「老人クラブや武老連の活動として、高齢者の生きがいづくり、健康づくりはもちろん大切ですが、それだけが目的ではないと思っています。隣近所の方々との関わりが希薄になっている今、日ごろから関係性を築いていれば、例えば地震や台風などの災害時にも、『あそこの家の○○さん、大丈夫かな』と声を掛けることができます。よく災害発生時には自助・共助が大切だと言いますが、自助・共助・近所ですよね。日ごろから地域の方々との関わりを増やしておくことで、連帯感や支え合いが育まれます。老人クラブはそうした役割も担っているのではないでしょうか。特に定年退職した男性は、それまであまり縁がなかった地域の方と触れ合うことで、自分の住む地域を知るきっかけになっているようです。ぜひ積極的に参加してもらいたいですね」

▲武老連会長 木川憲子さん

厚生労働省の発表によれば、令和5（2023）年の日本人の平均寿命は男性が81・09年、女性が87・14年、令和元（2019）年の健康寿命は男性72・68年、女性75・38年といずれも延びています。また、市内の高齢者数は3万3534人となっています（令和6年8月1日現在）。いかに人と触れ合い、生きがいをもって健康で長生きするかは、ますます重要な課題です。こうした観点からも、老人クラブと武老連の活動にはより一層の期待が寄せられているといえるでしょう。60年続いてきた武老連の活動の歴史を、これからもしっかりと紡いでいきたいものです。

参考文献／『武老連だより（市老連だより）』、『武蔵野開村百年記念 武蔵野市老人クラブ連合会二十五年のあゆみ』ほか